



問一 その時の状態がどのようなものかを表す擬態語を選ぶ問題です。Aは「なかなか言葉がうかばなくて」、Bは「好奇心」が「ふくらむ」がヒントになります。

問一 設問に「何に注目して書くことですか。」とありますので、「『ちょっとしたコツ』とは、〇〇に『注目して書くこと』」と考え、〇〇を教えてください。「わたし」は、「空つながり」「アウトドアつながり」「顔つながり」というように「言葉のつながり」に注目して書いています。「つながり」、「関連」などの言葉を使い、十字以内でまとめましょう。

問三 傍線部の内容は直前の一文とイコールです。その内容を説明しているのはAで、その他の選択肢は本文からは読み取れません。

問四 傍線部の「あと思った」は、「紙の文字」を見て驚いたということなので、その理由を探しましょう。傍線部の次の一文に「わたしが思いもしなかったものたちがつらなっていた」という理由が説明されています。

問五 傍線部に「この」という指示語があるので、その前の部分から探します。ヒントはターちゃんにうちあげた「きくことの達人」という言葉です。この言葉を詳しく説明している一文「わたしたちにはきこえないものも、瑠雨ちゃんの耳にはきこえているのかもしれない。」を中心に三十字以内でまとめましょう。

問六 1は直前に「しゃべらなくなつて通じあえるもんだ。」とあり、2は直後に「そんなよくばりな作戦」とあります。これをヒントに考えましょう。受験生は四字熟語の内容をきちんと確認できているようで、正答率はとても高かったです。

問七 「作戦」というキーワードで探していくと、次ページに「そんなよくばりな作戦だった」とあります。「そんな」が指している内容はその直前の二文にあります。二文ともに説明されている選択肢はAだけになります。

問八 心情の変化を問う問題です。⑥の傍線部の表現は、何度もまばたきを繰り返す様子なので「戸惑い」を表しています。また、その直前に「ぼかんとした目」とあるので、「驚き」も感じられます。⑦の傍線部の表現は、その直後にあるように「なにかをうったえかけている」表情だとわかります。その「なにか」は、最後の二文を読めば「謡曲をきいてみようという気持ちになった」ということがわかります。



2011年の東日本大震災から10年以上が経ちます。受験生の皆さんは「歴史上の災害」として理解している人が多いことでしょう。本を通しての支援、ボランティアのあり方について考える文章です。

問一 傍線部を文脈に合わせて具体化する問題です。「その視点」とは何か、「ずれてしまう」とはどのようなことを指すかを考えて選択肢を選びましょう。見出しにある通り、図書館は「常に『誰のためか』」と問うことが大切なので、「被災地の利用者のため」という視点で説明しているウが正解となります。

問二 図書館の必要性について、受験生自身の意見を問う問題です。設問の条件をしっかり押さえることが前提です。Aさん～Cさんのいずれかの意見に触れながら、皆さんにとっての図書館の意義を書いてください。12点配点の問題ですが、おおむねしっかり書けている答案が多く、記述力・表現力が豊かな受験生が多い印象でした。Aさんは本を通しての人々の交流、集いの場として、Bさんは日用品や食料

とは異なる、かけがえのない本との出会いの場として、Cさんは出来事や体験の記録・保存、アーカイブの役割として、図書館の価値を訴えています。自分が今まで図書館とどのように関わってきたかを振り返りながらまとめて下さい。本や図書館に全く触れていない解答だと減点対象になります。

問三 見出しをつける問題です。意味段落のまとめりごとに見出しがつけられていますので、その段落の要旨や文章の流れを押さえることが大切です。文章を読んでいくと、仮設住宅に住む人と家が残った人、または仮設住宅同士の「溝」が生まれていることに注目します。そして最後の一文に「誰でも利用できること」と書かれているのが大きなヒントになり、エが正解となります。

問四 「られ」の働きを識別する文法問題です。4か所の傍線部「られ」から、同じ働きをする2つを選ぶ設問を、難しく感じた受験生が多かったようです。同じ働きの法則性が分かれば、実は基本的な問題だと気付くでしょう。A、Dは「可能（～できる）」、Bは「尊敬」、Cは「受け身」の働きをしています。

問五 空欄にあてはまる言葉を補う問題ですが、意外と差が開きました。前述の問三と類似する考え方で、利用者を制限してしまう「溝」について考える問題です。誤答として多かったのが「遠慮される方」ですが、もう一步踏み込んで考えると、「遠慮される方」とは「～家が残っただけでもよかったからね」（P.3-9,1行目）と思っている人々、つまり「家が残った方」ということになります。字数指定がある場合、ほかに適切な言葉がないか、よく確かめる作業も大切です。

問六 傍線部を具体化する問題です。ここでも「同じ」ものを考えてみましょう。食料の分配と移動図書館の利用者に「同じ」問いが投げかけられている、ということです。傍線部の次の行に「～全員にオープンにする」と書かれているのがヒントです。

問七 移動図書館の応報活動について説明した選択肢をすべて選ぶ問題です。傍線部の直後からの説明をじっくり丁寧に読んでいけばイ、エ、オの3つが正解となります。イがぬけていたり、ウを選んでしまったという誤答が目立ちました。ウ「地元の書店」には本文では触れていません。

問八 「筆者の考えるボランティアの役割」とは、どのようなものでしょうか。本文の冒頭での問題提起と関連する問いです。「媒体にて徹せよ」というのが活動方針なので、ボランティア主導での復興ではなく、「地元の方たち」が主人公であることが大前提であり、ウが正解です。ア「～中心となって」、イ「積極的に」という表現は、ボランティアの立場を超える働きかけになっています。

問九 空欄にあてはまる言葉を補う問題ですが、本文全体のまとめにもなっている部分です。「地元の方たち」と「ボランティア」の関係を表したアが正解です。

☐ 言葉そのものを知らずに④「神童」を「震動」、⑤と「紀行」を「気候」と書いてしまう解答が見受けられました。ふだんから知らない言葉に出会ったら意味を確認する習慣をつけて、語彙力を増やすと良いでしょう。②「順延」は「準、純」、③「典型」は「展」、⑦「筋金」は「節」など、うっかりしたミスも多かったので、書き終えた後は必ず見直しをしましょう。